

北海道熊研究会」 Hokkaido Bear Research Association

ご意見ご連絡は本紙送信 email ではなく、下記の email へお願い致します
e-mail: kadosaki@pop21.odn.ne.jp

＜北海道熊研究会 会報＞ 第91号 2019年8月17日

北海道熊研究会事務局 北海道野生動物研究所内(Tel. 011-892-1057)

代表 門崎 允昭

事務局長 Peter Nichols ピーターニコルス氏

幹事長 藤田 弘志 氏

既報会報の1～90号はWebsiteに「北海道野生動物研究所」と入力しご覧下さい

「北海道熊研究会」 Hokkaido Bear Research Association の活動目的

熊の実像について調査研究し、熊による人畜及びその他経済的被害を予防しつつ、人と熊が棲み分けた状態で共存を図り、狩猟以外では熊を殺さない社会の形成を図るための提言と啓発活動を行う。この考えの根底は、この大地は総ての生き物の共有物であり、生物間での食物連鎖の宿命と疾病原因生物以外については、この地球上に生を受けたものは生有る限りお互いの存在を容認しようと言う生物倫理(生物の一員として人が為すべき正しき道)に基づく理念による。

＜札幌市南区で、人の存在を無視しながら、時に農作物や果樹を、食害しつつ(マスコミ報道による)、市街地を、徘徊していた熊を、出沒を、阻止する、対策を全く講じずに、銃殺したが、これは動物倫理に反する行為である (門崎允昭の見解) >

生物倫理とは、(生物の一員として、人が他種生物に対し、為すべき正しき道)の義。

熊がなぜ、札幌市の市街地にまで、出現するようになったか。その理由を、私が1970年から現在まで、継続調査して得た、資料を基に述べる。まず、熊は強烈な爆発音がする銃での殺戮を嫌い恐れ、致命所傷とならず助かったものは、銃で撃たれた場所に出て来なくなる。そのような事が続くと、その場所から人里方面には、熊は出て来なくなる。ところが、銃での殺戮を止めると、徐々に、また出て来るようになる。

札幌市での実情を言うと：私が札幌圏での熊の実態調査を始めた、1972年から1988年、10月迄の17年間、札幌圏での熊の捕殺は＜銭函

川上流部～奥手稲山～手稲山～永峰沢川上流部～砥石山～砥山ダム
>を結んだ西部地域一帯と、<滝野～常盤～焼山～夕日岳～朝日岳
(定山溪)>を結んだ南西部地域一帯から山側でのみ、銃で行われて
いた。札幌圏での罌の捕殺資料は、1964年からあるが、前記と同じ
である。従って、それより東部と北部と南部の山林に、罌が来る事
は無かった(下記に地図)。ましてや、人里や市街地に、罌が出て来る
事など、考えられなかった。

しかし、1989年～1998年の、10年間、札幌市管内では、罌を1頭も捕獲しなかった。その結果、罌が、生息域を人の居住圏方向に拡張し出し、10年後の、2008年頃には、人の日常生活圏近傍の山林地域に、罌が出没するようになった。そして、現在に至ったと言うのが、市街地に罌が出没するに至った経緯である。

罌の行動には必ず「目的と理由」が有る事、市街地に出て来る罌の目的は4大別される。

<出没の①> 若罌(母から自立した年の子の呼称)が検証に出て来る事がある。母罌から自立した(自立させられた)若罌が、独り立ちして生活する為の行動圏を確立するための探索徘徊過程で、

<出没の②> 道路を横断する目的で出て来る事が有る。

<出没③> 農作物や果樹や養魚を食べに出て来る。

④ その他、力のある個体に弱い個体が襲われて逃げ出る。子が里や市街地に出てしまい母が心配し出て来る。などがある。この場合には、出て来る個体については、性別や年齢は関係無い。

<今般の罌への対応策>

この個体が山林から出て来る場所は、罌の生態をたゆまず真摯に調査研究していれば、およその位置場所は特定し得るはずである。なぜ、そこに、電気柵を張って、出て来る事を阻止しなかつたのか。電気柵に触れ、刺激を体験すれば、例え、それを幾日か体験すれば、あの罌は、市街地に出て来なくなった可能性が強いと、私は確信する。

それを、為さず、銃殺した事は、あまりにもひどい。これを、対応規範に基づいて、殺したとか。仕方がなかったとか。この殺す事に関与した連中は・・・だろう。自然界がどう言うものか。人と自然界の有り様・・・分かっていないし、分かつてもしていない。その尊大な態度には、しっぺ返しを、来るだろう

<今回の罌について>

北海道新聞 2019年8月14日によると、この罌は、体長(鼻先と肛門間の直線距離)1.4m、推定年齢8歳とある。報道された行動様態と頭吻部の形からすれば、8歳では有り得ない。より若いはずである。年齢は、犬歯と最奥歯の歯肉との関係を見れば、2歳3歳、4歳以上(歯のセメント層に見える年輪で分かる)の、判別が着く。当局は、正確はdataを、公表すべきである。



1998年時の札幌圏の狸の生息圏(赤線の内側)。赤丸は1972年～2001年間の狸の捕殺地点(48地点)。